

第 22 回 JAMS 研究大会シンポジウム趣旨説明

比較のなかのマレーシア

——民族と宗教に関する国家・地域間比較への展望——

本シンポジウムでは、マレーシア研究における主要なテーマである民族と宗教について、周辺諸国等との比較をふまえて再検討し、両テーマについてのマレーシアの独自性あるいは通地域的な共通性を展望することを目指す。マレーシアと隣国との国境は、19 世紀に植民地勢力が設定した恣意的な境界線に起源するものであり、元来、社会・文化的な意味を持っていなかった。しかし、マラヤ連邦独立から 65 年、マレーシア連邦形成から 50 年を経た現在、この国で生じている様々な社会・文化現象は、「マレーシア的」と呼びうる性格を色濃く帯びるようになっている。たとえば民族についていえば、言語文化的な意味のマレー人は、マレーシアのみならず、タイやインドネシアに跨る広い範囲に居住するが、植民地期・独立後の政治過程のなかで、マレーシアにおいてマレー人であること（また、その対照カテゴリーとしての華人であること）は、きわめて独自の社会的意味を有するようになった。現在のマレーシアでは、民族カテゴリーは、政治・経済・宗教・文化等の様々な領域における実践のあり方を規定しており、その意味や内容は周辺諸国と明らかに異なっている。イスラームについていえば、19 世紀まで、マレーシアと隣国との間に、その伝播の過程や実践の内容に明示的な差異は認められなかった。しかし、独立後、マレーシアではイスラームは、憲法で「公式宗教」と規定され、国家による干渉のもと高度に制度化されていった。国家の干渉の影響はローカルな実践にまで及んだ。そのため、イスラーム実践のあり方も周辺諸国とは

相違するようになっている。

このようにマレーシアにおける民族と宗教のあり方は、周辺諸国とは様々なレベルで明確に異なっている。しかし、私たちはそれが具体的に「どのように異なるのか」をあまり論じてこなかった。人文社会学の領域では、長らく国民国家を単位とする一国研究が主流だったからである。現在、民族や宗教にかかわる実践は容易に国境を超えるようになっている。そうしたグローバル化状況において、両者に関わる現象がどこまで国家や地域の文脈に規定されているのか、あるいはどのような面で通地域的な現象、グローバルな現象であるのかを探ることは、地域研究にとって意義のある試みであろう。

本シンポジウムでは、こうした認識のもと、マレーシアおよび周辺諸国等（中東を含む）を研究対象とする研究者が、現地調査に基づいて民族と宗教に関連する社会・文化現象を比較検討していく。具体的には、まず片岡と長津が国境を跨ぐ民族を取りあげる。片岡の報告は、南タイのババ華人のあいだで、「輸入マレーシア文化」の再評価運動として展開する文化復興運動を論じる。長津の報告は、サバ州と東インドネシアのバジャウ人を対象に、民族生成・再編の過程とその文脈について考察する。ついで福島と見市が現代イスラームの動態を取りあげる。福島の報告は、中東との比較からマレーシアのイスラーム金融を論じる。見市の報告は、イスラーム社会団体や政党の組織化を取り上げ、それらのインドネシアとマレーシアでの異同を検討する。